

昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成19年8月5日発行(毎月5日1回発行)
第47巻8月号(通巻577号)

風土



黙契
神蔵器

七月や一期一会の一步踏む

桂郎と默契ほたるぶくろかな

余生即神の恩寵雲の峰

青葉木菟目に効くといふ温泉ゆに通ふ

友の母すこやかに在り花石榴

芋の露涼しきほどに育ちけり
窯出しをきのふに蚩袋かな
紫蘇の葉を噛んで山廬を遠くせり
枇杷熟れて上に流るる時の鐘
月光の地にとどきたる蜘蛛の糸
憲法九条文字摺草はつんつんと
くちなしの匂へり狂うてもよいか



竹間集

同人作品



薔薇

相沢有理子

四阿にきれいな日暮れ薔薇かをる
見え隠れ木の枝払ふ庭師かな
夏来ると肌にひんやり湿布薬
頬杖の桂郎に供花涼しかり
読みふけるクリステイ集夜半の夏
個室めき漫画喫茶の灯の涼し
青年の笑窪かがやく麦の秋

柚子の花

中谷 葉留

夕づつや種漬花の畦に泛き
久々の泊り客なり新茶汲む
残されし夫婦湯呑や柚子の花
城跡に建ちたる母校新樹光
日に透くるからたちの棘夏はじめ
仕る言葉の一つ 祭稚児
吊さるる百万遍の数珠涼し

めまとひ

小林 輝子

真ん中に能因島や春田打つ
尼の碑を覆ひて余る紅椿
熊谷草くすぐるほどの森の風
うぐひすの縄張りに入り遊行かな
巖抱く柵の走り根春深む
道のべに忌札代田さざなめり
めまとひを払ふに風に向かひけり

お花畑

小野寺節子

不揃ひに咲くも味あるお花畑
老農の福耳二つ麦の秋
虎が雨膝を這はせて畳拭く
天候で中途半端の更衣
卯月野にジューズの空缶五つ六つ
蜘蛛の囀にもがく羽虫の命かな
病葉をあやす尼僧のきざみ足

風 鈴

小林清之介

夏帽子買うてかむりて行く当てなし
あぢさゝの花の初めの薄緑
病妻をまねて夏日の厨事
腕に來し五月蚊鈍しすぐ打たる
夕風やはや風鈴を吊りし家
ベッド涼し腹這ひて書く稿一つ
鮓喰らふ八十六歳死ぬ気なし

柿若葉

田村すゝむ

次ぎつぎと闇押しして來る大神輿
千万の薔薇園只今支度中
井戸一つ残す城跡や富貴草
一と尋のわらべ唄碑や新樹光
杉戸絵は「船津蘭山」緑さす
蔵町の五月の空の高檜
柿若葉袖蔵のある和菓子店

茨 線

瀬戸

悠

山法師海賊船を湖に置き
なかんづく神の鶏とて羽抜けをり
浜小屋の浮き立つ板目南吹く
青胡桃川は流れを泳へをり
天空の昏れゆく蒼さ梨の花
短夜の付箋のもえぎうつくしき
茨線に昼顔の風吹いてをり

我孫子

— 中谷 葉留 —

逝く春の愛染明王坐像かな
梵鐘の下のしづもり春惜しむ
葉桜や身巾に上る札所径
成田線植田の中をすれ違ふ
白南風や胸に掌を組む鷹女像
産土に隣る学校棟咲く
えご散つて子供電車の発車ベル
雲の峰エピオルニス鳥の博物館 二句の卵かな
始祖鳥の化石レプリカ日の盛り
触れもして“白樺文学館 八句自じ帰き依え”の塑像緑さす

白樺派文士の夢や青嵐
直哉宛の漱石書簡涼しかり
汗引くと『暗夜行路』の稿を読む
夏の雲「鼻のつぶれた男」かな
閉ざさるる直哉旧居に蟻上る
滴りの音の中なる旧居跡
見取図に犬小屋ありぬ新樹光
小鷺舞ふ沼のほとりの文化村
鶴鳴いて青田に日暮引き寄する
大夕焼千間堤跡に立つ

ロダン

山河集

同人作品



神蔵
器選

なかんづく誕生の間の涼しかり
豎穴^{たてあな}住居^{すま}は温度十五度立夏なり
立夏なり炎色の残る火焰土器
唐澤山吉祥院に実梅落つ
栃咲けり復原住居の煙出し

中村 洋子

木の晩や五百羅漢に父のこゑ
駄菓子屋の前に木椅子や燕の子
尺蠖の間目を計る蔵の町
をけら焼く今に江戸の香残りけり
花十葉また思ひ出す母のこと

小林 共代

表札のなき画家の家百千鳥
スローライフてふ生き方や菊の苗
行く春や捨つる言葉のうづたかし

保田英太郎

沙翁忌や大声で読む「ハムレット」
飼犬の声変はりして卯月かな

下山田美江

学校のプール開きややご掬ふ
抽出しに石鱈の匂ひ薄暑かな
山帽子咲いて大仏次郎館
百千鳥腕に垂るるうはぐすり
鎌倉に五十六谷滴れり

卯の花やきのふに古りし誕生日
十葉にシヨパンの雨や十番館

小林 和子

河童淵

夏の月「河童に餌をやらないで」
身に添へる春陰齡加へけり
更衣赤城は裾を長くひく

◇特別作品（抄）◇

能登路

竹田 昭子

和倉温泉 弁天崎

原 泉 の 湯 気 総 身 に 麦 の 秋
登 四 郎 の 母 郷 の 句 碑 や 灯 の 涼 し
あ い の 風 虚 子 の 碑 に 聞 く 浪 の 音
宿 浴 衣 袖 畳 み し て 夜 半 の 湯 へ
夏 燕 定期観光バス フ ラ イ ト 号 の 一 人 旅
輪島朝市
藁 草 履 ひ さ ぐ 老 女 に 首 夏 の 風
逆 潮 や 地 べ た に 置 き て 夏 蕨
夏 浅 き 輪 島 の 市 に 箸 え ら ぶ
日 を 跳 ね て 牡 蠣 棚 ゆ る る 薄 暑 か な
夏 雲 や 鯨 待 櫓 と び と び に

風土独語／神蔵 器



義清の一丁坂や竹葉落つ

浅田 光代

「花の寺」の前書がある。花の寺は正しくは大原院勝持寺である。名だたる桜の名所ですつとはなく花の寺と親しまれるようになった。

義清の出家には謎が多い。鳥羽院下北面の武士として仙洞に勤仕していた佐藤兵衛尉義清は二三歳、兵法、射御、蹴鞠、歌道など文武両道に秀れ、地位も名誉も金も家庭にも恵まれていたのに保延六年(一一四〇)十月十五日出家した(百鍊抄巻六)。

出家の原因は、待賢門院璋子への禁じられた恋、また親友であった佐藤範康の急死により世の無常を悟り、これが出家のきっかけになったともいう。白洲正子さんはその著『西行』の中で「彼(西行)は世をはかなんだのでも、世間から逃れようとしたのではない。ひたすら荒い魂を鎮めるために出家した」と書いている。応仁の乱の兵火にもかかわらず焼け残り、今日なお現存する仁王門は竹林の中に蒼古たる風姿をとどめ、その仁王門をぬけさらけに孟宗竹と山桜にはさまれた参道を登ること約一丁、後ろに小塩おしおの高峰をひかえ、春は桜、秋はもみじ、昔ながらの京の面影を秘めた閑雅な境内勝持寺の寺門に至る。

勝持寺には西行の若き日の坐像、西行の鏡石(剃髮石)、西行桜(三代目)などあるが、これ等は西行が有名になった後から名

付けられたものに相違ないように思うが、移築されて裏山の二百メートルばかり登った山上にある西行庵の跡に辛うじて残っている礎石は当時のものであろう。ご住職の話では西行がこの寺で剃髮された確かな証しがないのではつきりしたことは解らない。と言って他のどこの寺にも西行の剃髮した証しがないので、不明のままであるが西行の剃髮したのはこの寺ではないかと思つてのことであつた。

いずれにしても仁王門から寺門に至る一丁の道程は悟りへの決断の道程であり、はたまた俗人に還る懸橋でもあつた。

おもかげに君が姿を見つるより

にはかに月のくもりぬるかな
西行

武州無双刃物屋藤兵衛水を打つ
林 いづみ

「水打つ」と「水撒く」は同じ季語であるが、全く違う。角川の現代俳句歳時記にも「打水」の「打つ」ということばには「打ち鎮めるといふ語感があり、炎暑で灼かれ、砂塵の舞い上がる路面を鎮め、涼しさを呼ぶのである」とある。つまり「打つ」の第一義は「うつ・たたく」で、相手を力を持つて打ち倒し征服する強い意志が働いている。

川越の蔵町通りには刃物屋が二軒あり、そのうちの二軒、勿論蔵造りで、看板に堂々と「武州無双」とあつた。この刃物屋の先祖は明治維新までは刀鍛冶であつたのではなからうか。武州出羽守光平や武州住安英など名工の流れをくむ。包丁や鉋など打つのは世を渡る飯の仕事。打ち水の一と打ちにも見事な切れがあつた。

風土集



神蔵 器選

行く春の魚開けば眼が二つ 高槻
ナプキンの白き帆ふたつ立夏かな
五月来るシーツの海へ子の飛んで

浅田 光代

義清の一丁坂や竹葉落つ

葵 祭

緑陰に烏帽子の並ぶ昼餉かな
街薄暑古寺巡礼となりにけり 東京
鐘涼し最後のひとつ打ち損じ

林 いづみ

武州無双刃物屋藤兵衛水を打つ
舞羅戸も畳廊下も風五月

小江戸川越振舞ひ水のそここに

五月来るイエスの小さき土不踏 平塚

中沢 三省

真つ直な道の暮れゆく麦の秋
実朝の越えし峠の五月富士

種蒔くや大地に生命まくごとく
路地一つ違へし庭の白薔薇

杜ぬけて能楽堂や牡丹忌 大分

若竹や静かに滾る茶釜の湯 寺坂 近子

石投げて万緑音を返さざる

スクランブルに日傘ふれあふ多佳子の忌

はつらつと音を剥がせり新キヤベツ

噴水やまだ約束の五分前 横浜 島田 和子

ベルギー 三句

マロニエ咲くカリヨンの音鳴りやまず
天を指差す大聖堂や夏の雲

聖堂に見るルーベンスの絵薄暑かな

アムステルダム

青嵐「アンネの家」を出でしより

刻決めて止まる介護車麦の秋 川崎 桐島 教子